
冒険--時空旅行者

空色スープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険 - 時空旅行者

【Nコード】

N1188K

【作者名】

空色スーパ

【あらすじ】

自然を愛する普通の小学生、穴田柚へゆずと原渕翔海へしようみ、そして奥村幸男へさちおが主人公のサイエンスファンタジー小説。原子力発電所の大爆発事故で、地域一体は臨界状態に。そんななか、生身の体で外にいたこの3人が時空の穴に吸い込まれ、コスモスラミラ摩訶不思議な世界に流れ着く。その星は、銀河の中心に位置し、地球とは全く違った技術を使った文明、いわゆる自然魔学を使った文明が発達している。3人はその星で、地球侵略の情報を聞き、自らの生活をするともに、地球への存亡をかけた黒の集団との戦いに

挑む。

第一章 原子力発電所大爆発（前書き）

この小説の人物または団体等は実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

「空色スーヴ」こと私自身が書いている小説は、すべて私と、その友達が共同で考え出した世界のことを書いております。もちろんその世界は空想の世界でございますが、果たして現実のことではないと完全に言い切れるでしょうか。小説、物語は子供たち、大人たちに夢を与え、自らの世界を気付かせるものだと思っております。直接的ではなくても、あなたが何かを感じるような、そんな小説にしたいと思っています。

第一章 原子力発電所大爆発

第一章 原子力発電所爆発

「のっぺー、答え見せるよー」

「自分で考えろ！ あ、いや、オツケー教えたる」

「サンキュー」

「1の問題は9、2は3、7の(1)は???」

テストの時間に、先生がちよつとでも廊下に出るといつもこのようなのだ。

それにしても、聞いてくる奴らもぜんぜん気づかない。僕は全くのうそを教えているのに、先生がテストを返してくれる日には必ず忘れている。そんな時、僕は必死で笑いをこらす。

のっぺというのは僕のあだ名だ。虫歯ができてしまい、顔の表情を変えると痛いのでずっと同じ表情をしていたら、隣の林が「のっぺら坊」と言い出したのだ。そんなことはもう何ヶ月も前なのに、いまだにみんながこのあだ名を使っている。

いや、そんなことはどうでもいい。早く校庭に行きたい。前の休み時間に作りかけていた秘密基地があるんだ。その秘密基地というのは、ぜんぜん秘密じゃない。クラスのほとんどが一緒に作っていて、その中心にいるのが僕と穴田くんというみだ。秘密基地は、学校の木の上にあつて、木の上にドングリとか磁石とといったがらくたが入った缶がおいである。その缶には秘密基地会員だけが使える遊び道具も入っている。問題はどやって木の上に上るかだった。校庭にはタイヤがいっぱいあったので、それを無理して積み重ねたがそのタイヤをよじ登れるのはほんの少数でほとんどが上れなかった。だから、今改造中ということなのだ。

後3分だ。2分…1分

「気をつけー礼！ ありがとうございます」

ダダダダダダダダダダダ

みんな一目散に走っていく。僕は穴田くんとうみを待った。

「あのタイヤどうしょか」

と穴田くんが難しい顔をして言った。

僕は少し考えて

「階段みたいにしたら？半分ピラミッドみたいに積み重ねて」

「うーん。いいかも知れんけど、めっちゃタイヤ要るで」

としょうみ

「それか、タイヤを木に立てかけて、立てかけたタイヤを地面に平行に置いたタイヤで支えたら、ちよつとは少なくなるんちゃうか？」

図書室の手前にある階段の前に来たときしょうみが提案した。

「場所とらへん奴がええなあ。いちおう秘密基地なんやで」

「そうやな」

階段を下りながらと僕としょうみが同時に言った。

「とにかく、現場見に行かんとどんくらいタイヤあんのかさえ分からへんやろ」と僕がいった。

校庭に出ると、ちびつ子がドッジボールや探偵（鬼ごっこ）のようなもの（など）をしていた。一人一人が走り回るので保健室の前にある白いコンクリートの道をそそくさと通って、校庭の端のほうにある森、とよばれる特に木のたくさん生えたところを目指して歩いた。「でもな、みんな知ってる秘密基地なんか面白くない気がするけどなあ」

と穴田くんが3人だけに聞こえるような声でつぶやいた。

「まあな。どっか見つからんところ探す？」

「そうしよそうしよ」

しょうみはすぐ調子にのる。

「よし。じゃあ、一人ずつわかれて場所探そ。で、休み時間はあと十分くらいやから、五十五分になったら、今の秘密基地のところに集合な」と僕が言った。

「オツケー、じゃあしょうみそつち行つて、僕はあつちに行く。奥村くんはあの辺やな」

と穴田くんが指揮をとった。

まず僕は鉄棒の後ろにあるツツジの花が咲く茂みの裏に行った。

ここは、妨球ネットがあつて、その間にあるから鬼ごっこではまづ入らない。でも、秘密基地にするにはすこし小さすぎた。それに、よく猫が糞をしにくる。

ツツジの茂みを抜けて、今度はうんていの後ろのフジが巻きついている日陰宿に行った。日陰宿は意外に人気がある。だから、また裏のほうに行つて探索した。日陰宿の裏は、もう学校の境界の塀がある。塀はコンクリートで出来ているので、冬でも暖かい日には力イロ代わりになる。しかも日照りがよく、比較的広い。タイアで隠せば見つかる心配もほとんどない。

ふと学校の校舎の一番上にある大きな時計を見ると、もう五十六分になっていた。僕は急いで、今の秘密基地に戻った。

しょうみはまだいない。ぬかるんだ地面の上をベタベタ言わせながら、穴田くんの横に立った。

「どうやった？」と穴田くんが聞いてきた。

「まあいいところは見つけたで。穴田くんは？」

「僕も。ただ春は使われへんで」

「なんで」

「毛虫の卵がいっぱいいてたもん」

「うわ。そう言うつてことは木の秘密基地の場所やねんな？」

「よくわかったな。そうや！面白いこと考えた！」

「しょうみが来たらいくつか質問をして、しょうみが見つけてきた場所をあてるっていうのはどう？」

「面白そうやな」

僕は学校で一番高い鉄棒にジャンプをしてぶら下がった。

五十九分になつてもしょうみは来なかった。

「なんかあつたんかなあ」と僕は話しかけた。

「わからんけど、もうそろそろ教室に戻らんと、給食食べられへんようなんぞ」

僕と穴田くんは砂煙のなかを始めはゆっくり、徐々に早足になって、チャイムが鳴ったところには、廊下を全速力で走っていた。給食が始まってちよつとしたところ、しょうみが痛そうな大きな絆創膏をひざにつけて帰ってきた。

「原渕、どうしたんや」と先生が聞いた。

「いやー、校庭を走ってたたら、鬼ごっこをしているグループに引つかかっちゃって……」

「それでそんな怪我したんか。大丈夫か」

「大丈夫です」

そういつてしょうみは椅子にどっこいしょと腰を下ろした。

僕としょうみは同じ班だったのでしょうみに、

「ほんまに大丈夫か？大縄の練習つて一体どんな練習してたんや？」とすこし笑って訊いた。

「実はな……」としょうみは声を落として身を乗りだし言った。

しょうみの話によると、危ないから休み時間中は禁止されているひも遊びを、一年生たちがやっていたそうだ。しょうみはそうとは気付かず通ったところ、見事転倒して怪我をしたそうだ。保健室では理由を聞かれるのだが、優しいしょうみは黙ってあげたそうだ。

「優しいなあ」と僕は言った。

その後の休み時間、穴田くんとしょうみと僕で、こっそり理科室から貰ってきたろうそくをみんなが一番よく走る図書室前の階段の踊り場に塗って、みんなが転ぶのを見て楽しんだ。先生も転んだ。でも、「先生は僕たちをしかれない。」と穴田くんは断言する。

「走るのがあかんのや。僕らは安全委員会やもん」

そう、この学校で3人とも安全委員会に入って、わざと危険を作り出しているのだ。

なんやかんやでやっと授業が終わり、疲れた下校？？のようと思

われるだろうが、ぜんぜん疲れていない。むしろ大元気だった。ひとつ残念なのは、しょうみと穴田君・僕の帰り道が違ふことだ。

帰り道は穴田さんと帰宅後の遊びの計画を立てる。

「今日は箱庭にまず行って、それから竹やぶにバンブーを取りに行くか？」

と僕が草むらを横目に見ながら穴田さんにいった。

「そうやな。あーでも、バンブー取りにいくんやったらもつと時間いるやろ？だから今日は缶ビンペットボトルの廃品回収日やから、使える奴を探して、蓄える日にしよう」

「賛成。余った時間はこの前の廃品回収で出たパソコンを分解しようか」

「オッケー、じゃ、また後でな」

僕たちは同じマンションに住んでいるが、棟が違ふため、いつも手前でわかれる。

そして僕たちの遊びは、ほかの子供たちとはすこし違う。僕たちの場合は自然の中で収集したり、物を作ったりして遊ぶ。

たとえば箱庭は、よく老人がやるような盆栽を改造して発泡スチロールの中で作るビオトープのようなものだ。ほかにも廃品回収で出たごみの中で遊ぶそうなのはとっておいて、いろいろなものを作っていく。僕たち3人はこんな遊び方を誇りに思っている。

「ただいまー」と言っ僕はすぐに着替え、おやつを探す。おやつを食べた後すぐに穴田さんの家に行く。

いつものように、箱庭がある駐車場跡まで行って、箱庭をいじっていた。

ふいに穴田くんがこんなことを言い出した。

「なんか、キナくさくない？」

キナが何なのか分からないが、確かに不穏な空気を感じる。

「確かに……なんか目も痛くなってきた。チ力チ力する」遅れてきたしょうみが息を切らしながら言った。

まさにそのとき、雷の数千倍するのではないかというくらいの爆音がし、目の前が真っ白になった。

衝撃波が何かで、僕は吹っ飛び、後ろにあった「貸し土地」の看板に激突した。

僕はのどが渇き、死に物狂いで水のあった川の方に進もうとしたが、心臓が悲鳴を上げていた。胸が苦しく、今度は空に持ち上げられるように、地面が遠ざかっていった。

「これが、死ぬってことなのか……」薄れ行く意識の中で僕はそう思った。

第一章 原子力発電所大爆発（後書き）

最初の投稿、短編の設定で出してしまいましたが、本当は連載です。申しわけございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1188k/>

冒険--時空旅行者

2010年10月9日04時03分発行